

2022年1月9日 礼拝説教要旨

詩編講解説教92「主の家に植えられ」

詩編92：13～16、ルカ2：36～38

詩編第92編は、分類においては「感謝の詩編」でありまして、全体的に神さまの救いを讃え、感謝する内容となっています。「いかに楽しいことでしょうか。主に感謝をささげることは」（2節）この冒頭の部分が詩全体を性格づけていると理解してよいでしょう。注目したいのは、「楽しい」と訳された言葉はヘブライ語でトープ、良いという意味の言葉です。トープはよく使われる言葉ですが、中でも創世記第1章31節「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」この「極めて良かった」がトープです。ここで思い出していただきたいのは、天地創造の御業が完了して、神さまがすべてを良しとされた。その次の日は第七の日、安息日であります。詩編第92編の表題1節を見ますと「賛歌。歌。安息日に。」とあります。それはこの詩編が安息日に歌われたことを示しています。ですから創世記の天地創造の物語と詩編第92編はトープ良いという言葉でつながっていることが分かります。神さまの御業が完成された。その創造の目的に達したことを喜び、感謝する日、それが安息日であります。詩人は救いの御業の完成を感謝して安息日にこの詩を歌ったのであります。

自分の人生が最後にどうなるのか、考えて不安になるということがあります。けれどもわたしたちは、この第92編を見る限り、少なくとも恐れたり、不安になる必要はないのです。神さまはわたしたちの人生をトープ「良かった」と言ってくださる。それゆえにわたしたちは感謝してこの人生を閉じることができるのです。しかも、毎日曜日この礼拝において、わたしたちは人生の完成形を先取りして見ることができます。これ以上、心強いことがあるでしょうか。そのような感謝と喜びをもってわたしたちは日曜日の礼拝をまもりまします。

けれども、よくよく考えますと、わたしたちの人生はそうのように神さまに良しとしていただけのようなものではありません。神さまに対して罪を犯してしまったからです。最初人間アダムとエバからすでに、神さまとの約束を破り、神さまのもとを離れて生きてきました。そこに罪の現実があります。毎週牧師が悔い改めの祈りをしますが、決して胸を張れるような人生ではない。それは一週間の生活においても、この生涯、人生を振り返ることにおいても明らかではないでしょうか。でもそのわたしたちが良いと言っていただけの理由、それはイエス・キリストの救いがあるからです。キリストが十字架でわたしたちの罪を贖ってくださった。この罪をすべて赦してくださいました。そしてよみがえりの御業をもって、わたしたちを本来の神さまに良しとされた人間に回復してくださいました。それによってもはや罪に支配されない新しい人間として生きていくことができます。だから感謝であり喜びなのです。

このキリストの救いが詩編92編にも示されています。今日読みました13～16節の部分は植物のイメージがあります。14節の「植える」と訳された言葉は、「移植する」という意味です。どこか別の場所に生えていたものを丸ごと移し替える。「主の家」「神の庭」に移植すること。人生を丸ごと神さまのもとに移植されるのです。そのことによって実が実るようになる。まっすぐに生えるようになる。お庭をされたりするのが好きな方は、実際そういう経験がないでしょうか。植物も生えている場所によって成長が違います。その土壌、日当たりによって実を实らせたり、実らせなかったりする。わたしたちの人生もエデンの園を追放され、やせた土地で実りのない人生だった。でもその人生を丸ごと「主の家」に移植された。それはキリスト

ご自身に移植されたと捉えることもできるでしょう。福音書に種まきのたとえ話がありますが、良い土地に蒔かれることです。それによってぜんぜん実りのない人生だったのに実をつけるようになり、天に向かってまっすぐ成長するようになる。そのようにわたしたちの人生は洗礼を受けることによってキリストに蒔かれ、そこから養分、命をいただき、天に向かってまっすぐ実りをもたらす人生に変えられたのです。その人生の完成形をここに垣間見るのです。

その具体的なことがここにあります。「神に従う人はなつめやしのように茂り、レバノンの杉のようにそびえます」（13節）なつめやしは中近東、アフリカ原産の植物ですが、別名フェニックスと呼ばれるものです。わたしは以前宮崎の教会でしたが、宮崎の県木はフェニックスです。おそらくなつめやしもいろいろと品種があるのでしょう、フェニックスは高くそびえ立つ木で、日南に向かう道の両脇に見事に生えています。しなかやなので台風でも倒れない。そういう強さをもっています。

ただ聖書には「なつめやしのように茂り」とありますから、ここでは実を多くつけることを言っています。もう随分前でしたが、阿蘇の内牧に草野留里子さんという教会員が住んでいて、そのお庭になつめやしが生えていた。わたしが驚いたのはそれこそ鈴なりのようにたくさんの実をつけていたことです。なつめやしの実はデーツと言います。最近は健康食ブームでドライフルーツにしたものが売られていますが、わたしも好きで時々買って食べています。あの甘さが疲労回復に良いそうです。なつめやしはそのような豊かな実りを意味します。

レバノン杉は、その名の通り中東のレバノンを原産とする樹木で、とにかく高くまっすぐに成長します。高いものは30～40メートルにもなるそうで、教会の塔が21メートルですから、いかに高いかがわかると思います。聖書でも「レバノンの杉のようにそびえます」とあります。天まで届くように高くまっすぐそびえるのが特徴です。また材質は硬くて神殿の建築にもこのレバノン杉が用いられました。イスラエルの人々は神殿を建てる時に、天に届くような思いを込めて神殿を作り、そこで人々は礼拝をしたのでしょう。

この日曜日の礼拝は、わたしたちが主の家に植えられ、まっすぐに天に向かって成長し、また豊かな人生の実りを実感するときです。人生の実りとは、キリストに結ばれ、そのよみがえりの命を生きることです。わたしたちはその実りを実感する日々を生きています。キリストによってわたしたちの人生は丸ごと主の家に移し替えられました。だからそのように生きることができるのです。